『都林泉名勝図会』(巻之四)金閣寺

「今さだかに遺れる所を　見ぬ人にも　しらせまほしく畫工をいざないて　露たがはずうつさしめ　なづけて都林泉図会といふ」(跋より)

京都のすばらしい庭園を紹介したガイドブックが、江戸時代中頃、寛政 11 年(1799)に刊行されました。数々の名所図会を、主に大阪の絵師竹原春朝斎(しゅんちょうさい)と共に世に出した秋里籬嶌(りとう)ですが、この『都林泉名勝図会』では挿絵を京都在住の絵師に任せました。籬嶌の文章を、西村中和(ちゅうわ)、佐久間草偃(そうえん)、奥文鳴(ぶんめい)の三人が彩ります。誰がどの絵を担当したかは、画面端の印章で確認することができます。

籬嶌と連れ立ち、筆と紙を手にし、洛中洛外を巡る絵師達の姿が目に浮ぶでしょうか。例えるなら絵師は、取材に同行するカメラマンといったところですね。

それでは私たちも後に続き、現代でもニュースで取り上げられる冬の風物詩、雪の金閣寺（鹿苑寺）を見にまいりましょう。

３ページをつなぐと、ちょうど中央に舎利殿（金閣）がくるパノラマ図となります。原本を切り貼りするわけにはいきませんので、ぜひこのデジタル画像でお試しください。拡

大してゆっくり境内を見渡してみると、屋根の上の鳳凰、舎利殿から外を眺める人、傘をさして歩く人、池の水鳥の姿などが生き生きと広がります。

（2016 年 1 月 18 日公開）